



TITLE:

<大會抄録>兩漢時代の市と市邑

AUTHOR(S):

紙屋, 正和

---

CITATION:

紙屋, 正和. <大會抄録>兩漢時代の市と市邑. 東洋史研究 1992, 51(3): 516-516

ISSUE DATE:

1992-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154412>

RIGHT:

欲追求を肯定する「濁」の發想と、これを社會秩序を亂すものと排除する「清」の理念の格闘の中で成長したと言えるのではないだろうか。

## 兩漢時代の市と市邑

紙屋 正和

秦漢時代の市については、これまでに長安九市の位置、市の構造、市籍の性格、官による市の規制、市の營業品目、市の遊民・遊俠、市での處刑などに關する研究が積みかさねられ、市の外形についてはかなりわかつてきた。とくに佐原康夫氏の近年の勞作「漢代の市について」(『史林』六八—五 一九八五年)は、都市の市(常設市)と都市からはなれた地點に存在する小市(定期市。本報告でいう市邑で、王符『潜夫論』浮侈篇には「市邑萬數」とある)との關係を明らかにして閑然するところがない。本報告はこれらの研究をふまえて、兩漢時代の市・市邑で行なわれた取り引き自體について若干の考察を行なうものである。

前漢前半期には富商大賈の活躍がめだち、しかもその交易の一定部分は市外で行なわれていたため、當時の商業にしめる市・市邑の比重は相對的に小さかった。ところが武帝期の抑商政策をへて富商大賈の活力が減退した前漢後期から後漢にかけて、市・市邑の繁榮がめだってくる。これは、單に富商大賈が後退して市・市邑が相對的にうかびあがったのではなく、小農民層の購買力の向上、周邊の

莊園や小農民の作物や調理すみの食料品といった生活に密着した商品、さらには奢侈品などの増加の結果おこったのである。かくて、かつての都市の遊民はともかく、小農民層との關係のうすかった市・市邑が、周邊の庶民の生活と有機的な關係をもつてきた。

## 一九三〇年代江蘇省無錫縣の

農村調査をめぐって

奥村 哲

舊中國農村經濟の調査では、滿鐵のそれが總合性・科學性において高く評價されている。華中についても、滿鐵上海事務所による無錫など六縣の農村調査のデータをもとに、多くの研究が發表された。しかしそれらの調査は、日中戰爭中に敵國日本が行なったものであり、それ故の制約が大きく、そこから直ちに戰爭前の農村の状況を導くことはできない。農民の回答の信憑性を除いても、調査地の選定の問題や戰爭による變動などが考慮されねばならないからである。從來の研究がこうした點に留意していない譯ではないが、十分とはいえない。可能な限り他史料と突き合わせて、滿鐵の調査を相對化する必要があるが、頼れる他史料がさほど多くないからである。

無錫は中國近代經濟史において獨自の地位を占めているためか、例外的に他史料は豊かである。まず一九二九年に、後の「中國農村派」の主要メンバーによって、二二村の二二〇七戸の調査が行なわ